

ジェイムズ・ジョイス

『ユリシーズ』第12挿話(新訳と注解)-その三

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 美彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8838">http://hdl.handle.net/10291/8838</a>

## ジェイムズ・ジョイス

### 『ユリシーズ』第一二挿話（新訳と注解）——その三

小川美彦

#### 凡例

\*印は将来において注解を付ける個所を示す。

割注に「訳」とあるのは「訳者の注」の意味である。そしてそれは、

Weldon Thornton : Allusions in *Ulysses*. An Annotated List.

Don Gifford with Robert J. Seidman : Notes for Joyce. An Annotation of James Joyce's *Ulysses*.

以上二冊の注釈書の注の訂正および一部加筆、もしくは新しく書き加えた割注であることを示す。

割注に例えば1—5八、2—3〇とあるのは、それぞれこの第一二挿話——その一、その二の参考にすべきページ数を表わしている。

略字として、Du ≡ *Dubliners* Ir ≡ Ireland D ≡ Dublin B ≡ Bloom M ≡ Molly を用いた。

聖書よりの引用は原則として Douay Version の章節によるが、Authorized Version への言及は「欽定訳」と明示した。また、聖書からの引用句の訳文は英国聖書協会の文語訳を用いたが、一部訳者が手を加えたところもある。

アイルランドの人名、地名の発音については、一部の古名をのぞきすでに英語化したものは英語読みにした。

——いっぽう俺たちの眼はヨーロッパに注がれている、って市民はなあ。わが国は雑種の犬ども〔アングロ人、サクソン人、ノルマン人、イギリス〕が産み落される以前には、スペインやフランス人やフランダース人と貿易をしていたんだ、ゴールウェイ〔三〕にはスペインのエールが山積みになり、湾の「葡萄酒色の」〔第二種話参照〕水路には葡萄酒運搬船があふれていた。

——またそうなるさ、ってジョウはなあ。

——聖母マリアの保護を得て、きつとわが国はまたそうなる、って市民はなあ、腿を強く叩きながら。空家同然のわが国の港がふたたび活気を取戻す日がかならずくる、クイーンズタウン〔現在のコーヴ、工南郡、コーク市の外港町。一九世紀〕、キンセイル〔コーク市南西二四キロの漁港。アングロノーマン時代以前からの海港で、特に〕、ゴールウェイ、ブラックソッド湾〔メイヨウ郡北西端のきわめて入漁んだ広大の湾。そのマリット半島付根の漁村ベルマレットの近くで、一五八八年に増減した〕、ケリ王国〔一五九の〕のヴェントリ〔ケリ郡北西のディングル半島南西部の漁港。この近くには有史以前の遺跡の宝庫。一五九の〕、世界全体で三番目にでっかい港キリベッグズ、そこにはゴールウェイのリンチ族やキャヴァンのオウライリ族やダブリンのオウケネディ族のマストが林立し、当時デズモンド伯爵の権勢は皇帝カルル五世と直接条約を結べるほど強大であったのだ。そしてアイルランドの最初の戦艦が怒濤をものともせず、って奴はなあ、わが国独自の国旗、だんじてチューダー王朝のヘンリ〔一五四七。イギリス王〕〔一五〇九。一四七、工南〕の竖琴なんかじゃない、そうだとも、デズモンドとソウモンドからなる州の旗で、ミレシウスの三人の息子を表わす三つの王冠を青地にあしらったわが国最古の旗をなびかせて、堂々と突きすすむとき、きつとまたそうなるんだ。

そういうと奴は、そうなるぞとばかりに、ぐいぐいと一気に残りのビールを飲み干した。※おむしがわ鞞革工場の猫みたいにすべてが虚勢と法螺ばかり。口※に風邪をひかす。奴ときたらシャナゴウルデン〔リマリック郡北西部、リマリック市の西二キロ、荒廃した一三世紀の家の遺跡〕へ出掛けて行って、そこに集った群衆にいつもの調子で大風呂敷をおっぴろげようものなら、まず生命はない、なにしろそこじゃ、追※い立てを喰らったさる小作人の家屋敷を横領したというのでモリ・マグワイアの連中が奴のとてっ腹に

穴をあけようと探し廻っている仕末、そこを敢えて出向くなんぞ奴には出来ない相談だ。

——いいぞ、いいぞ、ってジョン・ワイズ〔九二〕はなあ。何をおごりますかな？

——イギリス帝国義勇農騎兵なみに、ってレネハンはなあ、祝盃といこうぜ。

——テリ〔二八〕、小を一杯、ってジョン・ワイズはなあ、それと手を上げろを一本。テリ！眠っているのか？

——はい、お客さま、ってテリはなあ。ウイスキーの小とオールソップ一本。かしこまりました、お客さま。

アルフといっしょに三文紙をのぞき込んで〔二八〕、お客のことよりも刺戟を求めて夢中になっている。それは頭突き試合の写真で、互の石頭を割ってくれようと、一方が木戸を壊そうとしている牝牛よろしく頭を下げて相手にむかって突進している。そしてもう一枚は「ジョージア州オウマハ〔マ州の境にある「小村」〕で焼き殺された黒人野郎」。前つばの垂れた帽子をかぶった大勢のデッドウッドのディック、奴らは舌をだらりと垂らして木から吊され、そのうえに下から火炙りにされた黒ん坊に銃をぶっ放している。いっそのことリンチを気のすむまで徹底させて、次に黒ん坊を海につけ、電気椅子にかけ、それをさらに磔にでもすればいいんだ。

——だが、「鉄壁の護りを誇る」、ってネットドはなあ、勇猛なる海軍の場合はどうだい？

——俺の知ってることを話してやろう、って市民はなあ。「この世の地獄」さ、そいつは。ポーツマス〔イングランド南部の有名な軍港〕の訓練艦で行なわれる答打ちについて、いまいろんな新聞が載せている暴露記事を読んでみろよ。「忿懣やるかたない男」と名乗る投書家を書いてるぜ。

そこで奴は体罰について、それから水兵、士官、少将の乗員全員が三角帽をかぶって整列し、艦付き牧師が新教の聖書〔欽定英訳聖書〕を持って体罰に立ち会い、その前に、かあさんと泣きわめく若者が無理矢理にひっぱり出され、それをみなが大砲の尾部にうつ伏せに縛りつける模様をわれわれに話し出す。

——牛の臀肉とクラレット一ダースというのが、って市民はなあ、あの老悪党のサー・ジョン・ペリズフォードの呼び方だったんだが、現代の選民のイギリス人は臀への笞打ちという。

するとジョン・ワイズがなあ——

——「この習慣は守るよりも、守ることを潔しとしない方が名譽のもの」〔「ハムレット」〕。

それから奴は、前任衛兵兵曹〔艦内で警衛任〔務に当る〕〕が長い笞を持ってやってくる、そして一歩ふみ出して、可哀そうに男が人殺しと千回もわめくほど、力いっぱい尻を打ちすえる話をわれわれにした。

——これが世界をわがもの顔に振舞う、って市民はなあ、光榮あるイギリス海軍なんだ。「ゆめ奴隷となることなき」連中とはいえ、実は神の知ろしめし給うこの地上における唯一の世襲的議會をもち、国土がほんのひと握りの狩獵に明け暮れる好色漢と、鼻持ちならない貴族によって牛耳られている。これがあくせく骨身を削る労働者と笞うたれる奴隷とからなる、奴らの誇る大帝國の実体さ。

——陽の登ることのない帝國、ってジョウはなあ。

——それに悲しいことに、って市民はなあ、奴らは自分たちの光榮を信じている。不幸にもヤフー〔カリヴァ旅行記に登場する人間の姿をした獣性の動物〕どもはそれを信じているのだ。

かの者ら「この世の地獄」〔三三〕の造り主、全能の懲罰主なる笞を信じ、また大砲の子、スイヘイ・サン、すなわち罪深き誇言によりて宿り、勇敢なる海軍より生まれ、牛の臀肉とクラレット一ダースのもにて苦しみを受け、乱切され剥皮され、鞣皮の仕上げをほどこされて、死物狂いにわめき立て、三日目に寢床よりよみがえり、港に赴きて追って沙汰あるまで尻に坐し、かしこより生計のため齷齪働かんと来りて支払いを受くる主を信じ奉る。

——でも、ってブルームはなあ、懲罰の問題はどこでも同じじゃありませんか？ つまり、実力で暴力を制するかぎりは、

この国でも同じ評価を得るのじゃないでしょうか？

言ったとおりじゃないか！ いま俺がこの黒ビールを飲んでいるのと同様にたしかなことだが、奴はいまはの際でも、死ぬっていうことは生きることだなんて屁理窟を押し通そうとするだろうよ。

俺たちは実力で暴力を制するつもりだ、って市民はなあ。俺たちには海のむこうにもっと強大なアイルランド〔アメリカ合衆国〕がある。彼らは暗黒の四十七年に故郷から追い出されたんだ。道ばたの彼らの泥壁の藁屋やあばら屋は破城槌で取壊され、これに対して『タイムズ』紙は満足げに採手して、小さなサクソン野郎に、やがてアイルランドのアイルランド人はアメリカのインディアン同様に少くなるだろうなどと報じたものだ。トルコのサルタンでさえもピアストルを送って寄越した。それなのにイギリス人の奴、アイルランド国民をわざと餓死させようとしたんだ、なにしろ国にはイギリスのハイエナどもが買いいあさった穀物があふれ、それをリオ・デ・ジャネイロで売却する始末なんだから。そうだと、奴らは小作農を大量に逐い出したのだ。二万人の農民が死の船の中で息をひきとった。だが、「自由の国」にたどり着いた者は奴隷の国のことは忘れやしない。だから彼らはまた戻ってくる、しかもその時はもっと多勢で、勇気凛々と、グラニュエイルの息子として、キャスリン・ニ・フリーハンの戦士としてなのだ。

—— たしかにその通りです、ってブルームはなあ。しかし僕の趣旨は……

—— 市民、われわれはもう長いことその日のくるのを待っているのだ、ってネッドはなあ。貧しき老婆が「フランス軍が船に乗ってやって来」て、キララ〔上西部、メイヨウ郡北東部の村、司教座所在地「駅」〕に上陸したと教えてくれて以来だ。

—— うん、ってジョン・ワイズはなあ。われわれはわれわれを見棄てて独力でウィリアム一味に立ち向わせたステュアート王家のために戦ったというのに、ステュアートの奴はわれわれを裏切ったのだ。リマリックと、破られた条約調印の記念石を思い出せ。われわれは自分たちのもっとも優れた血をフランスとスペインのために流したのだ、雁として。フォントウ

ヌワ〔西ベルギーの村。トウル〕はどうかだい？ それにサースフィールド〔三一〕やスペインのテトゥアン公爵オウドヌル、それにマリア・テレサ〔M・テレジア〕〔一七〇一—一七八〇〕ハンガリーとボヘミアの女王の陸軍元帥であったカミューのユリシーズ・ブラウン。だが、われわれはそれに対してどんな代償を得たというのか？

——フランス人がなんだ！ 　って市民はなあ。たかがダンスの教師のたぐいさ！ 　どうしてこういうかわかるかね？ 　奴らはいまだかつてアイルランドのために屁にもなったためしがない。あいつら、いまテイ・ペイの晩餐会で食わせ者のイギリスめ〔三〇〕と和親協商の締結に努力しているじゃないか？ 　ヨーロッパの扇動者、事実奴らはいつもそうだったじゃないか？

——フランス人をやつつけろ〔三一三〕、ってレネハンはなあ、まんまとビールをせしめながら。

——またブルーシア〔プロ〕人とハノーバ王家はといえば、ってジョウはなあ、選挙侯ジョージからあのドイツの若造、さらにはくたばった、あののぼせやがった性悪ばあにいたるまで、俺たちはいつもウインナにばくついている奴らをいやというほど王位につけてやったじゃないか？

いやはや、俺は例のばあさんを評した奴の話し振りに失笑せざるを得なかった。奴ときたら彼女のことを、目枷せをして、每晚毎夜王宮で峯の露〔スコッチウイ〕を、ヴィックのばあ、しこたまひっかけてぐでんぐでんに酔っ払い、お付きの御者〔ジョン・ブラウン〕〔一八二六—一八三〇〕一八四九年以来英王座に仕入りの従者兼女入〔歌〕に体ごと抱き上げ、ベッドにごろりと投げ込んでもらい、ばあはばあでその男の頬髯をひっ張って、『ライン河畔のエーレン〕〔エーレンブライトシュタイン〕』や『酒の安いところへおいで』などと昔の歌の端ばしを唱って聞かせる有様、なんていうんだからな。

——まあ、まあ！ 　ってJ・J・はなあ。いま戴いているのは「平和の招来者」エドワードなんだぜ。

——馬鹿も休みやすみ言え、って市民はなあ。あの若造には平和なんかよりも梅毒の方がはるかにお似合いだ。エドワ

ド・グエルフ・ヴェティーンなんて！

——それからあの度しがたい奴ら、ってジョウはなあ、悪魔陛下のお抱え騎手の制服の色でメイヌース〔Ir南東部、キルデア郡の市場町。D市から西北西二三キロ。ローマ・カトリックの主要な聖職者教育センター所在地として有名。訳〕のレセプション会場を塗装し、おまけにその騎手たちが乗り廻したすべての馬の版画を飾ったアイルランドの司祭と司教をみなはどう思うかい？ さすがにダブリン伯爵だけのことはある。

——奴らはむしろ陛下自身が乗り回したすべての女を飾ればよかったんだ、ってちびのアルフはなあ。  
すると、J・J・がなあ——

——部屋の大小を勘案して、閣下たちはそう決断したんだよ。

——市民、もう一杯どうだい？ ってジョウはなあ。

——お言葉に甘えて、って奴はなあ、もう一杯。

——君は？ ってジョウはなあ。

——ジョウ、かたじけない、って俺はなあ。ご健康を祈ります。

——もう一杯ずつみなに、ってジョウはなあ。

ブルームはジョン・ワイズとさかんに話していたが、やっこそん焦げ茶の黒ずんだ泥色の面つらをし、どんぐり目玉をぎよろぎよろさせてひどく興奮していた。

——迫害といえ、って奴はなあ、世界の歴史を通観すれば枚挙にいとまがないほどです。それは国民の憎悪を国家間に定着させることになるのです。

——だが、君には国というものの意味がわかっているのかい？ ってジョン・ワイズはなあ。

——もちろんです、ってブルームはなあ。



——じゃあ、何だというのかね、ってジョン・ワイズはなあ。

——国ですか？　ってブルームはなあ。国とは同一の場所に居住する同一の住民のことですよ。

——いやはや、それでは、って笑いながらネッドはなあ、もしそうなら過去五年間、同一の場所に居住しているこの俺さ  
まは国ということになる。

そこでとうぜん、みなはブルームを嘲笑ったが、急場をきり抜けようとして奴がなあ——

——またはいろんな場所に居住しているひとびともです。

——それは俺の場合にあてはまる、ってジョウはなあ。

——ではお訊ねするが、あんたの国はどこなんだい？　って市民はなあ。

——アイルランドです、ってブルームはなあ。ここで生まれたので。アイルランドですよ。

市民は答えるかわりにはげしく咳払いをして啖を出し、いやもう、奴ときたら部屋の片隅まで、レッド・バンク・レスト  
ラン〔D市南岸、オコンヌル橋に続く〕の牡蠣ぐらいもあるでっかいやつをべっと吐き飛ばした。

——ジョウ、先によってくれ、って奴はなあ、ハンカチを取り出して口のあたりを拭いながら。

——さあ、市民、グラスを、ってジョウはなあ。これを右手に持って、本官の言葉を繰り返して言ってみたまえ〔判事が証人に  
て誓いの言葉をいわせるのを真似て。  
証人にってウイスキーが聖書〔訳〕。〕

精巧な刺繍をほどこされた秘藏品で、『＊バリモウトの書』の著者、ドゥロウマのソロモンとマナス・トマルタク・オグ・  
マクダナの作と伝えられる古代アイルランドの手巾がそのとき用心深く取り出され、しばしの賛嘆をよび起した。芸術の極  
致である四隅の刺繍の言い伝えられた美についてはいまさらくだくだ述べるまでもないが、その刺繍模様には、＊四学者のひ  
とりひとり、順次それぞれの福音史家の象徴である櫛かしのの埋れ木の笏しやく、北米産ビューマ（因に、百獣の王としては、イギリ



を与えられていっそう美化され、今日のわれわれにもいぜん訴えかけてくる。

——グラスを俺の方に寄越してくれ、って俺はなあ。どれがどれかな？

——それが俺のだ、ってジョウはなあ、死んだポリ公にいう悪魔の台詞じゃないが。

——それに、僕はまた嫌われ、ってブルームはなあ、迫害を受けている人種に属しています。こんにちでもいぜん。ただいま。現にいまも。

いやはや、奴はすんでのところ短くなった葉巻〔四六〕で指に火傷をするところだった。

——奪い取られ、って奴はなあ。略奪され。侮辱され。迫害され。本来われわれのものであるものを取り上げる。ただいまでも、って拳を振り上げながら奴はなあ。モロッコでは奴隷や家畜と同様に競売で売りとばされているのです。

——あなたは「新しいエルサレム」〔「黙示録」21―22。ここではキリスト教の来世の神の國と、シオニズムの理想である祖国の回復をめざす「訳」〕のことをいっているのかね？ 　って市民はなあ。

——僕は不正のことをいっているのです、ってブルームはなあ。

——そのとおり、ってジョン・ワイズはなあ。だったら、みなで雄々しく力でそれに立ち向うことだ。

まさに唇くちびるに出てもおかしくない状況。柔頭銃弾〔弾頭部が堅い金属外殻でおおわれておらず、命中するとその衝撃できのこ状につぶれて被害をさらに大きくする。ダムダム弾のこと。一九〇七年第二回ハーグ会議で使用禁止「訳」〕の絶好の標的。挑みかかる砲口に勇ましく立ち向う脂ぎった顔の奴〔B〕。いやまったく、帯を飾るほうが奴にはふさわしい、たしかに、子守の前掛けをすればなおさらいいが。それが奴ときたらいきなり腰くだけになり、いままでとはがらりと変って、濡れ雑巾みたいにへなへなになる。

——しかし、そんなことをしても無駄ですよ、って奴はなあ。なにしろ相手は暴力、憎悪、歴史、そのすべてなんですから。そんなものは男にとっても女にとっても、人間らしい生き方じゃありません、侮辱だの、憎悪だのというものは。もち

ろん誰でもそれが真に人間らしい生き方とは正反対のものだということは知っています。

——その生き方とはなんだい、ってアルフはなあ。

——愛ですよ、ってブルームはなあ。つまり憎悪の反対です。ええっと、もう僕は行かなくちゃなりません、って奴はジョン・ワイズになあ。マーティン〔21〕がいるかどうかを見にちょっと裁判所へ行くんで。もし彼が来たら、すぐ帰るっていつて下さい。ちょっとの間です。

誰がお前をひき止めたりするものか！　そこで奴は取るものもとりあえず、そそくさと出てゆく。

——ユダヤ人ならざる者に福音を説く使徒の再来だ、って市民はなあ。普遍愛を。

——だが、ってジョン・ワイズはなあ、それはわれわれが教えられていることじゃないかい？　汝の隣人を愛せよ〔記〕<sup>19</sup>  
21「八」「マタイ」  
22「三九参照」<sup>22</sup>ってな。

——あいつ「B」がか？　って市民はなあ。相手をとことん捲きあげる、これが奴のモットーさ。愛なんて、ちゃんちゃらおかしいや！　奴はロミオとジュリエットの結構な見本さ。

愛は愛を愛することを愛する。看護婦さんは新しい薬剤師さんを愛している。お巡りさんの一四A〔22〕はメアリ・ケリを愛している。ガートイ・マクグウェルは自転車をもっているあの男の子を愛している〔参照〕。M・B・〔モリ・ム〕は金髪の紳士を愛している。李基漢<sup>\*リキハン</sup>、差不多愛する、キスする。象のジャンボは象のアリスを愛している。喇叭型補聴器<sup>ちんぱ</sup>をつけたヴァースコイルじいさんは、ロン・パリのヴァースコイルばあさん〔一九〇四年当時D市の南近郊のプラ<sup>ラ</sup>を愛している。褐色の雨合羽の男〔参照〕は亡くなった女のひとを愛している。国王陛下は女王陛下を愛している。ミセス・ノーマン・W・タッパはお巡りさんのテイラーを愛している〔28〕。ひとは誰かあるひとを愛している。またこのひとはさっきのひとを愛している、というのも、だれでも誰かを愛しているからだが、しかし神さまはだれでもすべてのひとを愛している。

——やあ、ジョウ、って俺はなあ、君の健康と歌を祝して。市民、健闘を祈る。

——やあ、こっちこそ、ってジョウはなあ。

——神と聖母マリヤと聖パトリックの祝福がみなの上にありますように、って市民はなあ。

——そういうと、奴はグラスをあけて、ぐいと喉をうるおす。

——みながああ、宗教偽善者のことは知っている、って奴はなあ、説教するかたわらポケットから掘り取る連中さ。砲口のまわりに「神は愛なり」〔欽定訳「ヨハネ第一の」書〕418—16〔訳〕という聖書の文句を貼りつけて、ドゥロイイダ〔ポイン川に跨るラウス郡の都市、旧跡に〕の女子供を斬殺したえせ信心家クロムウェル〔スウィフトの政治家、清教徒革命の立役者〕とその配下の鉄騎兵団を見てみろよ。聖書だなんて！ あんたはいまイギリスを訪問中のズールー人の酋長を皮肉った、今日の『ユナイテッド・アイアリッシュマン』紙〔Irのイギリス化を併して、その自主独立を標榜するアイリッシュ・グレイフス〕の戯文〔以下の記事は〕を讀んだかい？

——どんな戯文だったんだい？ ってジョウはなあ。

——そこで、市民は自分の手回り書類のひとつを手にとり取って、声を出して讀み始める——

——マンチエスタ〔イングランド北西部、リヴァプール東部の主要な繊維物業界の大立者からなる代表団が昨日、式部官長ロード・薄氷歩行者の紹介でアベアクタ国〔ナイジェリア南西部の都市。本来は広大な地域を占める町村グループ〕の君主陛下に拝謁を賜わり、その領地において与えられた便宜のわずかに対して、イギリス商人の心からなる謝意を言上した。代表団は昼食を共にしたが、終りに臨み黒人君主陛下はイギリス人の宮廷牧師アネイニアス・神の恵み・骨皮筋衛門師が自由に通訳した巧みなスピーチの中で、薄氷旦那に深甚なる謝意を表明し、アベアクタ国とイギリス帝国との間に存在する友好関係を強調し、自分が白人の女酋長で偉大なおかみさんのヴィクトリアから有難くも贈られ、しかも恐れ多くも贈与者の威厳に満ちた筆による個人宛の献呈の辞を賜わった、神のみ言葉の書であり、イギリスの偉大さの秘訣である彩飾聖書〔一九〇四年五月下旬、六月上旬に訪英した際に、問〕を秘宝のひとつとして愛

蔵していることを披露した。君主陛下はそれから一黒人と白人万歳」と祝盃を挙げ、四十疔とあだ名されたカカチャカチャク王朝の先王の頭蓋骨を使って、極上のウイスキーで親善の盃〔通例二個以上の取手のついた銀製の盃で〕を傾け、そのあとで綿織物都市〔スタチエ〕の主要な工場を視察して来賓名簿に記号で署名をし〔文字を書けな〕、続いてアベアクタ国古来の出陣の踊りを演じてみせたが、その最中に、笑いさざめく女工たちの拍手喝采を浴びながら、数個のナイフとフォークを呑み込んだのであった。

——寡婦女王の意図には、ってネッドはなあ、疑う余地はない。ただやっこさんが例の聖書を俺とおなじように扱ったかどうか〔Ir人はイギリス人からのアセントを好まない〕は疑問だが。

——俺もおなじ気持だ、いやそれ以上さ、ってレネハンはなあ。かくしてそれからというものは、地味の肥えたその国では、大きな葉のマンゴーが豊かに繁茂するようになったとさ。

——戯文はグリフィスが書いたのかね？　ってジョン・ワイズはなあ。

——いや、って市民はなあ。\* シャンガナックっていう署名じゃない。ただ頭文字でPとあるだけさ。

——それもなかなかいいイニシアルじゃないか、ってジョウはなあ。

——イギリス帝国のからくりはそんなところにあつたんだ、って市民はなあ。国旗が貿易に先行するのさ。

——それはそれとして、ってJ・J・はなあ、もしイギリス人がコンゴ自由国のベルギー人よりも少しでも質たちが悪いというのなら、彼ら以上の悪人はいない。君はあの報告書を読んだかね、あれを書いた、その、何とたったっけ？

——\* ケイスメントさ、って市民はなあ。奴はアイルランド人だぜ。

——そう、その男だ、ってJ・J・はなあ。女や小娘を強姦したり、強制的に赤いゴム液を絞れるだけ絞り出させるために、原住民の男どもの下腹部を思いきり打ち据えたりするんだ。

— 奴がどこへ行ったか知ってるぜ、ってレネハンはなあ、指を鳴らしながら。

— 誰のことだい？ 　って俺はなあ。

— ブルームさ、って奴はなあ、裁判所なんて口実だよ〔三〇四〕。奴はスロウアウェイ号〔三〇〕に三、四シル賭けていたんで、そのぜいご金をもらいに出掛けたのさ。

— あの白眼\*の偽善者のことかい？ 　って市民はなあ、気がむしゃくしゃしてるときにや、今まで一度も馬に賭けたことがないだなんて。

— 奴がほんとうに行つたのはそこなんだ、ってレネハンはなあ。パンタム・ライオンズ〔四一〕に逢つたとき、やつこさん、俺がとめなければあの馬に賭けるところだったんだが、奴がいうには、ブルームが知恵をさずけてくれたらしい〔第五挿話参照〕。

奴が五シリングで百シリング儲けたのはぜったい間違いない。あの馬に賭けたのはダブリンでも奴だけさ。まったくのダーク・ホースだったんだ。

— ちえっ、あいつ自身がダーク・ホースなのさ、ってジョウはなあ。

— ジョウ、すまないが、って俺はなあ。入口はどこだい、ちょっと出たいので。

— どうぞ、ここです、ってテリ〔三三〕はなあ。

さらばアイルランドよ、ゴート〔コルウェイ郡南部の市場町。エニス市の北東二八キロ〕へ行かん。そこで俺はしょんべんをするために中庭の奥までちょっと出掛け、いやまったく〔五シリングで百シリング〕溜った小便〔スロウアウェイ号、対二十〕を放出している間に、いやはや俺は心の中で考える。俺のみるところじゃ、奴は逃げ出したくて内心〔ジョウのおこり〕でビール二杯と、スラック酒場〔グレイト・シップ・ストリートで食料雑貨、紅茶、葡萄酒、酒類商を営むウィリアム・S.の経営〕で一杯だから内心じりじりしていたんだ〔百シリングは五ポンドだ〕、そしてやつこさんらふたりが下宿していたとき〔一四六〕。ダーク・ホースだった、小便おやじのパーク〔四七〕の話ではトランプ

の集りがあつたが、子供が病氣だと嘘をつきやがった（いやはや、一ガロンぐらいは出たぞ）、ぶよぶよの尻をした妻君が受話器を通してこう話す、「子供の容態はよくなったわよ」とか「子供の容態は」（おっ魂消たな！）、もし奴が勝つた場合には、賭け金ぜんぶを持ってずらかれるようにあらゆる計画をめぐらしておいた、場合によっては（おやおや、いくらでも出るな）奴らはもぐりの商売でも平気でやる（おっ魂消たな！）、私の国はアイルランドです〔313三八〕、って奴はなあ（シュッ！ シュシュ！）、金のことではあゝの（これでお終い）エルサレムの（やれやれ！）郭公〔寄託腎性の鳥〕もどきの侵入者どもにはとうてい敵わない。

そうやってとにかく俺がもどつてくると、みなはがやがや論議を戦わしていたが、ジョン・ワイズがいうのに、グリフィスに、手を変え品を変え、自派に有利に選挙区を改定し、陪審員を自派の者で固め、政府の税金をごまかし、それにアイルランドの工業製品を売り歩く領事を世界中の国々に任命するといったシン・フェーン〔11四七〕の計画をその新聞〔314三四〕で公表するように示唆したのはブルームだった。「金を一方から奪って他方に与える」〔在の形は一七世紀半ばに成立〕。あのいい加減な奴が俺たちのことをひっ搔き廻すようになれば、もうすべてがお終いだ。俺たちだけにやらせろ。あんな詮索好きなお節介者なんかから「神がアイルランドを救い給わんことを」。やたらに異論を挟むブルームおやじ。それに奴以前にも、いんちき常習犯の奴の親父、老メトシエラ・ブルームがいた、国中をまやかし物の装身具や安物のダイヤモンドで氾濫させて、挙句のはてに青酸カリで自殺した喰わせ者の行商人。手ごろなお支払い条件で、通信による貸付け。いかなる金額でもサインひとつでご用立て。一報参上。担保不要。いやはやあの男ときたら、ちょっとの間誰にでもついてゆくランティ・マクヘイルの山羊みたいなものだ。

——とにかく、これは本当の話さ、ってジョン・ワイズはなあ。それに、そのことについて話してくれる人物がちょうどいまご到着だ、ほかならないマーティン・カニンガム〔2一〇〕さ。



果せるかな、政庁の馬車がマーティンと、ジャック・パワともども、それにもと税関本部勤務の年金受給者で、ブラックバーン〔ズ地区に住んでいたD郡会秘書官〔訳〕〕の下で土地登録の仕事をしているオレンジ結社〔一七九五年に、アルスタ州のプロテスタントの支配権を擁護するために結成された過激な秘密結社。その名称は一六九〇年のボイン川の戦いの勝者オレンジ公ウィリアム三世（一六五〇—一七〇二）にちなんだもの〔訳〕〕員のクロフタダかクロフトン〔Duの「委員室の高の目」に出る速拳運動員〔訳〕〕とかいう男、彼は国費で国中を遊び回って、それともクローフ・オード〔21—27 参照〕かな、給料をもらっている、そんな男とを乗せてやって来た。

わが旅人ら當の田舎風旅籠屋〔はたごや〕に到り、おのがじし乗馬より降り立ちぬ。

——いかに、下人！ と、その體〔てい〕よりしていかにも一行の中心人物とおぼしき御仁の嘸鳴りける。小頼〔こたの〕な下郎め！ これへ！

かくいいながら、騎士はあいた格子戸を刀の柄にて音高く叩きぬ。

宿の亭主お呼びに應〔まぶ〕えて罷り出ず、甲斐がいしく上張りを腰に紐で結びながら。

——これはこれは檀那衆、ようお出でなされました、とぺこぺこ頭をさげながら亭主いいぬ。

——いかに、しっかりせんか！ と先刻戸を叩きし御仁の嘸鳴りける。馬の面倒を見てくれ。そしてわしらには最高の料理を振舞ってくれ、なにしろ近ごろ空腹なんぞな。

——檀那さま方、生憎〔あはれ〕ではございまするが、と亭主いいぬ、手前どものぼろ家の貯藏室はからっけつてございましてな。

あなた方に何を差し上げればよいか、とんと見當がつかませぬ。

——はて、そこもと、これはちと戴き兼ねるぞ！ とにこやかな二番目の男、聲張り上げて云いぬ、樽口檀那、そなたは勅使をかくの如く遇するや？

と、亭主の顔色にたちまち變化が現われぬ。

——各々がた、どうかご容赦を、と亭主平身低頭して云いぬ。もし皆さま方が勅使でござっしゃるなら（國王陛下に御加

「護のあらんことを！」、何ひとつ御不自由はいたさせませぬ。陛下の御朋友に（國王陛下に祝福のあらんことを！）ひもじき思いをさせるなど手前どもでは斷じていたしませぬ。

——然らばかれ！ と、いまだ口をききしことなき、いかにも健啖家らしき旅人の聲高に云いけり。何を振舞ってくれるぞ？

店の亭主、またもお辭儀をして答えて申すようは——

——檀那さま方、雛鳩の肉入りパイに二、三片の薄切り鹿肉、仔牛の鞆下肉、かりかりの牡豚のベーコン付き緋鳥鴨、ピスタチオの實添え猪の頭、特上カスタード一丁、蓬菊よもぎの味つき西洋花梨かりんの實入りプリン、それに古ライン白葡萄酒一本ではいかがでございましょうか？

——これはしたり！ と最後に話せし騎士の叫びて云いぬ。そりゃわしの大好物だわい、ピスタチオとは！

——へっへっへ！ とにこにこ顔の御仁が大聲にて云いぬ。ぼろ家からっけつの貯藏室とは笑止千萬な！ 愉快的悪黨

親仁じゃ。

そのようにしてマーティンが入ってきた、ブルームはどこかと訊ねながら。

——はて、どこへ行つたんだろうな？ ってレネハンはなあ。どうせ後家\*さんや孤兒みなとから金を捲き上げているのさ。

——本当じゃないかい、ってジョン・ワイズはなあ、ブルームとシン・フェーン運動との関係について俺が市民に話していたことは【3—四五参照】？

——そのとおりだ、ってマーティンはなあ。少くともみなはそう言っている。

——誰がそんなことを言い触らしたんだ？ ってアルフはなあ。

——俺さ、ってジョウはなあ。俺がその言い触らした当人さ。



るのだ。だからユダヤ人の男はみな、自分が父親か母親になるのがわかるまでは、極度の興奮状態にあるそうだ。

——今かいまかと期待して待っている、ってレネハンはなあ。

——いやあ、ほんとに、ってネッドはなあ、あの死んだ息子が生まれる前のブルームを見せたかったな。俺は妻君が出産する六週間前のある日に、市の南の市場で、ニーヴの乳児食品の缶詰を買っている奴に出逢ったことがある。

——ジ・ウシントン・サ・メルかあさん腹に、ってJ・J・はなあ。

——そんな奴を男だといえるかい？ 　って市民はなあ。

——あいつはほんとにいち物をちゃんと入れたのかなあ、ってジョウウはなあ。

——まあ、とにかく、子供がふたり出来たんだからな、ってジャック・パワはなあ。

——じゃ奴は誰が父親だと思っているのかい？

——いやまったく、「冗談から本真」ほんまっていうこともある。例の男女おとこおんなというやつだ、あいつは。小便おやじ三四の話では、月に一度、メンスになったコールガールみたいに頭痛でホテル四七に引きこもっていたということだ。俺のいうことがわかるかい？ あんな奴はひつつかまえて、海に抛り込んだ方が有難がられる。正当殺人というところだ。それに、しこたま儲けたというのに、男らしく飲み代を支払うということもしないで、五ポンド三四を持ち逃げする。ヤハウエの祝福を俺たちに給わらんことを、なんて！ 目薬一滴ほどの酒もおごりゃしない。

——隣人への愛三四だなんて、ってマーティンはなあ。それにしても彼はどこだい？ 僕たちは待つておれないよ。

——羊のなりをした狼一五さ、って市民はなあ。それが奴の正体だ。ハンガリー生まれのヴィラーグだなんて！ 俺にいわせりゃ、奴はアハシユエロス中世後期に汎く流布した「さまよえるオランダ人」の伝説的な名前のひとつ。エルサレムの靴屋「祝」さ。呪われた者だ。

——マーティン、おみぎを一杯ひっかける暇はあるかい？ 　ってネッドはなあ。

——一杯だけだよ、ってマーティンはなあ。僕たちは急ぐんでね。J・J・&S・〔I<sup>r</sup>の代表的なウイスキー、ジョン・ジェイムスン。〕を。

——ジャック、君は？ クロフトンは？ テリ〔三四〕、ハーフ三杯。

——聖パトリックにしても、わが国があんな奴らに思うままに毒されたからには、って市民はなあ、もう一度バリキンラ〔I<sup>r</sup>北東部、ダウン郡のダンドラム湾内海の西岸ダンドラムフェリーによって結ばれる対岸の村。上陸地点は普通はサウル（I—五六注解参照）とされる訳〕に上陸して俺たちを改宗し直さなければならぬと思うだろうよ。

——まあ、まあ、ってマーティンはなあ、ウイスキーを催促して机をとんとん叩きながら。僕の祈りは、こここの仲間にな神のお恵みがありますように、だ。

——そうでありますように、って市民はなあ。

——きっと聞き届けられると俺も思うよ、ってジョウはなあ。

すると祭鈴の音につれて、侍祭をわきに從えた十字架奉持者を先頭に、香炉奉持者、舟形香壺奉持者、読師、守門、助祭、副助祭の面々に先導されて、司教冠を戴いたベネディクト会修道院長、ドミニコ会修道院長、フランシスコ会修道院長、修道士および托鉢修道士からなる聖列が近づいてきた、すなわちすべての会士、\*スポレトウのベネディクト会士、カルトゥジオ会士とカマルドリ会士、シトー会士とオリヴェト会士、オラトリオ会士とヴァンヴァロンブローザ会士、およびアウグスチノ会托鉢修道士、ブリジッタ会修道女、ブレモントレ会士、聖母マリア下僕会士、三位一会会士ならびにベトロ・ノラスコの弟子、それとともに、カルメル山で発祥した司教アルベルトウスとアヴィラのテレサを指導者とする、予言者エリアの履足、既足の弟子が、また褐色や灰色の会服の列、清貧に徹するフランシスコの子孫、すなわちカプチン会士、繩帯の原始会則派会士、ミニモ会士、厳律フランシスコ会士、クララ会修道女、つづいてドミニコの子孫、すなわち説教者托鉢会士およびヴィンセンシオの子孫、つぎに聖ウルスタンの修道士、イグナチウスのイエズス会士、つぎにエドモンド・イグネシヤス・ライス修道士を指導者とするアイルランド・キリスト教育修士会信心会が続いた。そしてそのあとから諸々の聖人お

よび殉教者、諸々の童貞および証聖者の群がやつて来た、すなわち聖キリクス、農夫の聖イシドルス、聖小ヤコブス、シノペの聖フォカス、欲待者聖エリアヌス、カンタリチエの聖フェリックス、柱頭隠者シメオン、最初の殉教者聖ステファヌス、神の聖ヨハネ、聖フェレオルス、聖ルガイド、聖テオドトス、聖ヴェルマール、聖リチャード、聖ヴィンセンチウス・ア・パウロ、トデイの聖マルティヌス、トゥールの聖マルティヌス、聖アルフレッド、聖ヨセフ、聖ディオニシウス、聖コルネリウス、聖レオポルド〔B〕、聖ベルナルドゥス、聖テレンチウス、聖エドワード、聖犬族オウエン、聖匿名者、聖名祖なせむ、聖筆名者、聖同音異義者、聖同源者、聖同義者、聖ロレンス・オウトウール、ディングルとコンボステラの聖ヤコブス、聖コルムキルにして聖コルムバ、聖ケレスティヌス、聖コウルマン、聖ケヴィン、聖ブレンダヌス〔一七八三〕の聖注解、聖フリジディアン、聖セナン、聖ファクトナ、聖コルムバヌス、聖ガルス、聖フルサ〔一七八一三〕、聖フィントン、聖フィアクル、ネボムクの聖ヨハネ、アクイノの聖トマス、ブルターニュの聖イーヴ、聖マイカン〔一五四五〕、聖ヘルマーンヨゼフ、高校生の三人の保護聖人、聖アロイシウス・ゴンザガ、聖スタニスラウス・コストカ、聖ヨハネス・ベルヒマンス、ゲルヴァシウス、セルヴァティウス、ボンファティウスの諸聖人、聖ブリード、聖キアラン、キルケニの聖カニス、トゥアムの聖ヤールス、聖フィンバル、バリマンの聖バビン、フランシスコ会士アロイシウス・好和人パチワクス〔一三二四〕、もと有頃アッソジの聖フランシスコによつて、フランシスコ会士ルイ・好戦人ベリコウス〔創作上〕、リマのローザ、ヴィテルボのローザの諸聖女、ベタナで改心、愛弟子のひとりとなる〔訳〕、フランシスコ会士ルイ・好戦人〔人名〕、リマのローザ、ヴィテルボのローザの諸聖女、ベタナの聖マルタ、エジプトの聖マリア、聖ルチア、聖ブリジッド、聖アトラクタ、聖デイルムブナ、聖イタ、カルペ〔二〕の聖マリオン〔M〕、福者修道女幼きイエズスのテレジア、聖バルバラ、聖スコラスティカ、一万一千人の処女をひきつけた聖ウルスラ。しかも全員が輪光〔神の三つのペルソナや聖人、殉教者など、教会〕や後光〔神の三つのペルソナと聖母〕や環光〔もつとも高い神威を表す〕に包まれ、棕櫚しほちの葉〔罪と死に対する殉教者〕や堅琴〔ダビデ王の表号。彼の作といわれる詩篇、おまじひ〕や剣〔剣による死という意味から、多くの殉教者〕等々は聖表号〔訳〕やオリーブの枝〔オリーブの枝は平和の、また〕冠〔冠は勝利と卓越の象徴〕を身につけ、それぞれの聖人の効験を象徴する角製インキ壺〔藤ペンとともに、四〕

ノの聖トマス〔前出〕、聖ベルナドゥス〕、矢〔聖教者などのように、信仰に生きる精神的な武器を象徴。〕、パン〔聖体拝領のホスチアに見られるように、生命の糧の象徴。エ〕、  
 カップ〔聖ベネディクトゥス〔前出〕の表のひと〕。毒を盛つた〕、手枷〔キリストの受難の象徴。磔刑の前に、柱にうしろ〕、鉢〔破壊の象徴。大工聖ヨゼフ、および  
 〕、樹〔生命の樹、智慧の樹、イエッセの樹〕、橋〔猿芝を囃まされ、手足を縛られた橋の上からモルダ〕、桶の中の幼な子〔サンタ・クロイスで知られる、塩漬け  
 〕、目鼓〔とくに帆立貝の貝殻は聖ヤコブス〔前出〕の表のひと〕。遺骸を葬ったコンポステラ〔近くには帆立貝の産地がある〕は中世における巡礼最終地として有名〔訳〕、  
 ロクウスとカンタリチエの〕、やっここ〔袴間器具として、乳房をひき〕、鍵〔天の御心の鍵の保持者として、聖ペテロ、賢明で〕、竜〔悪魔の象徴。悪魔〔異端を含む〕  
 聖フェリックスの表のひと〕、百合〔清純の象徴。聖母マリアの花。真実の象徴として、聖ドミニコ〔前出〕、聖フラ〕、鹿弾、顎鬚〔師としての權威  
 マルタ〔前出〕、カッパドキアの聖ジェオルジウ〕、百合〔清純の象徴。聖母マリアの花。真実の象徴として、聖ドミニコ〔前出〕、聖フラ〕、鹿弾、顎鬚〔師としての權威  
 ス、聖ベルナルドゥス〔前出〕等の表のひと〕、聖スコラスティカ〔前出〕、聖クララ〔前出〕等の表のひと〕、鹿弾、顎鬚〔師としての權威  
 と〕二人の弟子の絵によく使われる。独身生活を望んで、求婚者撃退〕、牡豚〔色欲の象徴。この魔物を退治したエジプト〕、灯火〔智慧と敬神の象徴。とくに聖ルチア、  
 法〕ではやしらされた聖ウィルゲフ。独身生活を望んで、求婚者撃退〕、牡豚〔色欲の象徴。この魔物を退治したエジプト〕、灯火〔智慧と敬神の象徴。とくに聖ルチア、  
 〕、蜜蜂の巣〔推しの象徴。聖アンブロシウス、聖クリソストムス、ク〕、大匙〔子供が持つ。もとは帆立貝殻〔訳〕〕、  
 星〔神の導きの象徴。東方の星、二の星〕、蛇〔墮罪の誘惑者である蛇は悪魔の象徴。聖ペトリキウスは蛇を踏みつけ〕、鉄床〔聖マドリリアヌスの表のひと。殉教にあたって先〕、  
 ワセリンの小箱〔香油〔神の祝福、さらには愛、友情、兄弟の和合の象徴〕の小箱の世俗的呼称〕、鈴〔聖アントニウスの表のひと。悪魔を払い浄める力〕、松葉杖  
 〕、老婦と衰弱の象徴。長年わたる砂漠での隠修士と〕、鉗子〔外科医兄弟、聖コスマ〕、牡鹿の角〔牡鹿は敬虔と神への願望、あるいは孤独と清浄な生活の象徴。角の間を  
 〕、防水長靴〔死者の主人公ゲイブリエル、グレッタ・コンジュイ夫妻〕、鷹〔た異教徒を象徴。聖ユリアヌスの表のひと〕、石臼〔サラゴサの  
 〕、血の上の眼球〔聖ルチアの表のひと。彼女の眼に刺さった思ひ悩む求婚者〕、蠟燭〔聖パウロの表のひと。伝説にもとづいて、  
 〕、灌水刷毛〔悪からの浄化を象徴。聖アントニウスの表のひと。予め祝別された二本〕、一角獣〔清純および女性の貞潔の象徴。  
 〕、織り込んだ祭服を着てやってきた。そして一行が<sup>\*</sup>立て、輝け〔イザヤ〕<sup>60</sup>で始まる主の御公現  
 の祝日の入祭文と、それに続いて「シェバから来る」〔イザヤ〕<sup>60</sup>と唱える昇階誦の「ものはみな」〔同上〕をこの上なく感動的  
 に歌い上げながら、ネルソン記念柱〔ID市北岸、オコンヌル・ストリート〕の四柱にあり、一八〇八年建立。四〕、ヘンリー・ストリート〔オコンヌル・  
 〕、メアリ・ストリート〔さしに西に接続〕、ケイベル・ストリート〔と交る商店街〕、リトル・ブリテ

ン・ストリート〔2〕と進むうちに、聖徒はさまざまを奇蹟を行なった、例えば悪霊を追い出す〔マタイ9〕とか、死者を蘇らす〔マタイ9〕、八と二五、ルカ7二二と五、マルコ5三三と四三参照〕とか、魚の数をふやす〔マタイ14一五と二〇、15一三と一七、マルコ6一三五と四一、足なえや盲人〕〔4〕、〔ルカ〕を治す〔マタイ11一〕、紛失したいろいろな物を見つけ出すとか、聖書を説きあかし〔ルカ24〕成就する〔マタイ5〕、祝福を与え、予言する〔ルカ2一三四〕とかいった。そして最後に、金布の天蓋を戴き、マラキヤとパトリキウス〔1一五六の注参照〕を侍者としてオウフリン司祭がやって来た。そして神父さまたちが所定の場所、リトル・ブリテン・ストリート八、九、十号の卸し売り食料雑貨商、葡萄酒およびブランドー貿易商、店内で飲用すべき麦酒、葡萄酒、火酒販売免許店バーナド・キアナン商会（有限）の店に到着すると、司祭は家を祝別し、中方立のある窓、穹稜、穹窿、柱稜、柱頭、切妻、軒蛇腹、鋸歯状の縁で飾ったアーチ、尖塔、小丸屋根に撒香し、その楣に聖水を振りかけ、神がアブラハムとイサクとヤコボス〔ユダヤ人の祖先の総称。旧約聖書ではこの三人は我々の祖先といふ意味で、いつも並んで使われる。「出エジプト」3一六参照〕の家を祝別し給うたごとくこの家を祝別し、神の「光の御使い」〔1一四四〕たちをそこに住まわしめ給わんことを祈願した。それから家に入ると、司祭は食料と飲料を祝別し、一行の福者たちがみないっせいに司祭の祈りに返禱した。

＊ われらの助けは主のみ名にあり。

——主は天地を造り給えり。

——主、なんじらとともにいまし給え。

——また、なんじの霊とともに。

それから司祭は福者たちに按手して神に感謝を捧げ、つぎに彼が祈ると、みな相和して祈禱をあげた。

——み言葉もてすべてを聖ならしめ給う神、願わくはこの被造物の上に主の祝福を注ぎ給え。主のいと聖なるみ名を呼び奉れば、主のおきてとみ旨に従い、感謝もてこれを用いるすべての人をして、肉体の健康と靈魂の守りとを、主より受くる



を得しめ給え。われらの主キリストによりて。

——同じように俺たちみなも云う、ってジャックはなあ。

——ランバート、大金に与れますように、ってクロフトンだかクローフオードだかなあ〔<sup>31</sup>三四六<sup>〇</sup>〕<sub>【参照】</sub>。

——その通りだ、ってネットドはなあ、ジョン・ジェイムスン〔<sup>31</sup>三五〇<sup>〇</sup>〕<sub>【参照】</sub>をとり上げながら。「豊かな生活に恵まれますように」。

俺はつぎに誰がいい乾盃の辞を思い付いてくれるか知りたいと思って、ちようどみな顔を見廻していると、ちえっ、きやつがやけに忙しそうにしてまた入ってきやがる。

——僕はちよっと裁判所へいっていたんです、って奴はなあ、君を探しに〔<sup>31</sup>四二<sup>〇</sup>〕<sub>【参照】</sub>。どうも大変……。

——いや、ってマーティンはなあ、こっちはもうすんだところだ。

裁判所だなんて笑わせやがる。お前のポケットは金貨や銀貨の重みで垂れさがっているというのに〔<sup>31</sup>四四<sup>〇</sup>〕<sub>【参照】</sub>。さもしいけちな野郎。俺たちに一杯ぐらい奢ってくれてもよさそうなのだ。ちえっ、心配無用だ！ 正真正銘のユダヤ人だからな！ てめえさえ好ければいい。雪隠の鼠<sup>せつこん</sup>みたいにずる賢い。五で百〔<sup>31</sup>四四<sup>〇</sup>〕。

——誰にもいふなよ、って市民はなあ。

——な、何ですって？ って奴〔B〕はなあ。

——さあ、みんな、ってマーティンはなあ、雲行きが怪しいと見てとって。さあ来給え。

——誰にもいふなよ、って市民はなあ、大声を張りあげて。秘密だぞ。

その声で犬〔<sup>31</sup>三二<sup>〇</sup>〕のやつが眼をさまして唸り声をあげた。

——諸君、失敬、ってマーティンはなあ。

そういうと奴はふたりに出来るだけ早く退散させた、ジャック・パワとクロフトンだかんの誰兵衛だかを促し、いかにも当惑げな顔をしている奴〔B〕を真中に、みなを例の二輪馬車〔314六参照〕のやつに乗つけた。

——さあ、いこう、って御者にむかってマーティンはなあ。

乳白色の海豚が鰐を振り上げ、舵手は金色の鱸にのぼって来て、脹らんだ帆を詰め開きで掲げ、それから左舷の大三角帆をはじめ万帆を張り、沖にむかって船を進めた。数多の美わしい水の精が右舷、はたまた左舷に近づいて来て、その堂々とした帆船の舷側に付き従い、きらぎらした体を繋ぐ様は、ちょうど老練な車大工が車輪の轂の周りに、互に對を成す輻を等距離に配し、つぎにそれらすべてを外輪と結合させ、ひとびとが遠征におもむき、あるいはまた佳人の微笑をかち得ようと競っているとき、その歩みに疾風の勢いを与えようとするようなものだ。このようにして彼女らは来り、群がった、あの疊惑的な水の精、不死の姉妹らが。そして彼女らは笑いさざめきつつ、泡沫の円を画いて遊び戯れ、片や帆船は波を切って進んだ。

ところがいやまったく、俺がちょうどグラスの底をテーブルの上に置こうとしていたとき、気がつくくと、市民のやつがむくと立ち上って、水腫病みみたいに喘ぎあえぎ戸口の方へ千鳥足で歩き始め、アイルランド語で奴〔B〕にクロムウェルの呪いを浴せかけ、さらに鐘書燭による破門を宣告してぺっぺっと唾を吐き出したが、ジョウト、妖精みたいに彼にまつわりつくちびのアルフが奴を宥めようと懸命になっていた。

——ほっといてくれ、って奴はなあ。

そしていやまったく、奴はふたりに腕をとられたまま戸口のところでゆき、大声でわめく——

——イスラエル万歳！

おい、後生だから議員みたいに尻をおろして静かにしていよう。そしてみだりに公衆の面前で恥曝しな真似はするもん

じゃない。いやはや、いつの世の中にも馬鹿げたことで馬鹿騷ぎをやらかす太鼓持ちみたいな馬鹿なやつがいるものだ。ちえっ、そのために胃袋の黒ビールが酸っぱくなっちゃまう、そうだともし。

お蔭で戸口のあたりには国中の乞食やら淫売やらがわんさと押しかけ、マーティンは御者に馬車を出すように命じ、市民はいさいかまわずわめき続け、それをアルフとジョウが黙らせようと必死になるが、奴ときたらますます付けあがってユダヤ人の悪口をならべ立てると、浮浪者どもが一席ぶてとはやし立て、ジャック・パウはパウで、ブルームに馬車にじっとして半兵衛をきめこませようと懸命、それなのに、眼に眼帯をした浮浪者が、「月の中の男がユダヤ人なら、ユダヤ人なら、ユダヤ人なら」と歌い出し、ひとりの淫売も大声で叫ぶ――

—— おや、にいさん！ 社会の窓があいてるよ、にいさん！  
するとブルームはなあ――

—— メンデルスゾーン〔ヤコブ・ニコラウス・フエリックス・M・リバルトルディ（一八〇九―一八七四）ユダヤ系ドイツ人の作曲家、ピアノ奏者、指揮者。作品に「フィンガルの洞窟」（三―三九参照）など多数。両親の代でキリスト教に改宗〔訳〕〕はユダヤ人でした、カール・マルクス〔K・ハインリッヒ・M・（一八一八―一八八三）ユダヤ系ドイツ人の経済学者、社会主義運動家。著「資本論」。両親の代でキリスト教に改宗。さらに自分は反ユダヤ主義者同然〔訳〕〕も、メルカダントテ〔リオ・セッペ・サヴェ・M・（一七九五―一八七〇）イタリアのオペラ作曲家、カトリック教徒。Bはメルカダントテが影〕も、スピノザ〔ベネディクト・バルフ・デ・S・（一六三二―一七〇四）ユダヤ系哲学者。はじめユダヤ教の教育を受けたが、次第にその信仰から離れ、破門、改宗された（一六五六）〔訳〕〕も、救世主もユダヤ人でしたし、その父親〔ヨセフ〕もユダヤ人でした。それをあなたたちは神として認めている。

—— キリストには父親はいなかった〔ヨセフは養父。〔マタ〕〕よ、ってマーティンはなあ。もうこんなことは沢山だ。馬車を出してくれ。

—— 誰が神としてだって？ って市民はなあ。

—— とにかくキリストの伯父はユダヤ人でした〔代々〕家全部がユダヤ人。〔マ〕よ、って奴はなあ。それにあなたたちが神として

認める者もユダヤ人だったので。キリストは僕と同様ユダヤ人でした。

いやはや、市民は店の中へ飛んで帰った。

——イエスにかけて、って奴はなあ。あのユダ公め、キリストのみ名をだしに使いやがって、脳天をぶち割ってくれるぞ。イエスにかけて、奴を十字架につけてくれるぞ、きつとだ。あのビスケットの缶〔三二〕をこっちへ取ってくれ。

——よせ！ よせよ！ ってジョウはなあ。

首都およびグブリン周辺から集合し、感激に胸をふくらませた大勢の友人、知人が、王室御用印刷業者アレグザンダ・トム商会の前社員、リポティ〔英語のリテポルトに相当するハンガ〕・ヴィラーグ〔四八〕閣下が遙かなサーザルミンチプロユーグリヤースドゥグラス〔せせらぎの平原〕の国へ旅立つに当り、暇乞いに多数参集した。華々しく挙行された式典はきわめて感動的な厚い友愛に彩られていた。アイルランドの芸術家の手になる、彩色文字で飾られた古代アイルランドの仔牛皮紙の巻き物が、参会者の大部分を代表して当の著名な現象学者〔一四四〕に贈呈され、続いて古代ケルトの装飾品を模して風雅に仕上げられ、製作者ジェイコブ兄弟商会〔四六〕の最高の名誉になる製品、銀製の小箱が呈上された。去りゆく客人は温い歓送を受け、アイアリツシュ・バッグ・パイプのえりぬぎの楽団が『エリンへ帰りきたれ』のよく知られた旋律を、すぐ続いて『ラコツツイ・マーチ』を奏し始めたときには、多くの参会者が明らかに感動の色を浮べた。四海〔北東のノース海峽、東方のアイジョウシ海峽〕の海岸線にそって、ホウスの丘〔一〇九のベン〕、スリー・ロック山〔D市南方。D山脈北東の先端部〕、シュガロウフ山〔D市南東の保護地。アレイ市南西の大小ふたつの岩山〕、ブレイ・ヘッド岬〔アレイ市の南、海岸線にそって二四一メ〕、モーン山脈〔U北東部、現在の北IのDとくに大シユガロウフ山は頂上からの景観で有名〕、ゴールティ山脈〔I南西部、リマリツク、ティペラリ両郡〕、オックス山脈〔I西部、スライゴウ郡西部にあとの国境に近い海辺の山脈。そのなだらかな起伏〕、とドニゴール郡〔I北西部の起〕とスペリン山脈〔I北東部、アテ郡南西部、タイロウ郡と〕、ネイグル山脈〔I南部、コーク郡北部にある〕とボガラハ山脈〔同じくコーク郡のネイグル山脈の西にある。最高峯六四六メートル〕、コネマール地方〔三二〕の山脈〔三九〕など〔一〇一〕、マックギリカディ山脈〔一九〕、スリーヴ・

オーフティ山脈〔<sup>Ir西部、ゴールウェイ、クレア両部に</sup>、<sup>最高峯三十九メートル</sup>〕、スリーヴ・バーナハ山脈〔<sup>Ir西部、クレア郡東部に</sup>、<sup>最高峯三十九メートル</sup>〕、スリーヴ・ブルーム山脈〔<sup>Ir中央部、リッシュ郡北東部に</sup>、<sup>最高峯五十八メートル</sup>〕の頂で、<sup>＊タール</sup>瀝青の樽と大祝火に火がつけられた。天空をつんざく歓声の中、遙かなカンブリア〔<sup>イルズ</sup>の古称〕とカレドニア〔<sup>スコットラ</sup>の山々に屯する同調者の大群が答える歓声の応酬を受けて、マンモス遊覧船が、参集した多数の女性の代表者たちが投げつける最後の花の餞に送られてやおら動き出し、やがて解船の船団に護衛されて川をくだる間にも、<sup>＊港湾局と税関の旗竿が敬礼のしるしに倒されてまた引き起され、さらに下流では、</sup>ピジョン・ハウス〔<sup>ジョン・ピジョン</sup>木造船があったところ。後に非常事態に備えた堡壘となり、また現在の発電所になった。D市南岸、海中にのびるビジョン・ハウス道路の先端にある〕の発電所の旗もこれに倣った。さよなら、わが友よ！ さようなら！ 去れども忘れらるることなし。

いやはや、奴ときたらまったく手のつけられないような勢いで、しゃにむにあの缶〔<sup>31</sup>〕のやつをひっ掴むと飛び出していったが、ちびのアルフが肘にかじりついているものだから、やっこさんナイフで喉をひと突きされた豚みたいにひいひいわめき立てるが、そのざまときたらクウィーンズ劇場のへぼ芝居同然の観物だ。

——やい、降りてこい、きつとぶっ殺してくれぞ！

それを見て笑い惚けるネッドとJ・J。

——どえらい剣幕だ、って俺はなあ、俺は大詰を見届けてやるぞ。

だが、運よく御者は馬の首を反対方向に回して、はい、どうどう。

——まあ侍で、市民、ってジョウはなあ。やめろよ。

いやもう、奴は腕をあげると、思いきりはずみをつけて投げ飛ばした。有難いことに日光が奴の眼にはいったからよかつたものの、相手を殺すところだった。いやはや、奴はロングフォード郡〔<sup>D市の北西一四五キロ。郡</sup>はロングフォード〕まで投げるほどの勢いだつた。馬のやつがびっくり仰天し、老いばれの雑犬〔<sup>31</sup>〕が死にも狂いで馬車を追っかけ、わいわい連中は大声で叫ぶやら

笑うやら、空き缶が路上をからんからんと転がっていった。

この天災地変の影響は凄まじく、また艱面（きんめん）であった。ダンシンク天文台〔D市北岸、フェニックス・パークの北にある〕は合計十一回の震動を記録したが、そのいずれもがメルカルリ〔ジュセッペ・M・（八五〇—九一四）イタリアの地震学者、地震学者。五段階震度階の考案者〕の震度階の震度五であり、一五三四年、つまり絹飾騎士トマスが反乱を起した年の地震以来、この島国ではこれに匹敵する震災の記録は残されていない。震源地は主都の、それも一六七、九七五・八平方メートルの面積を占め、「キングズ」イン河岸区と聖マイカン教区〔注：一五四の〕を構成する地域であった模様。裁判所〔一七〕の近辺の豪華な邸宅はすべて破壊され、また当の堂々とした建物、災害が起きたときに、ちょうど重要な法律上の討議が行なわれていたその建物までが文字通りの瓦礫の山と化し、居合わせたすべての者がその下に生き埋めになったと懸念されている。目撃者たちの報告を総合すると、旋風性の激しい大気の変動に続いて地震波（は）が起ったことが知られる。のちに、非常に尊敬された国事および治安裁判所書記ミスタ・ジョージ・フォトレ〔自宅はD市南東の近郊、キリニイのストランド地区にあった〕のものであることが確認された冠り物と、博学で高潔な、四季裁判所の裁判長にしてダブリン市最高判事サー・フレデリック・フォークナ〔二五〕の頭文字と紋章と番地を金色の柄に彫りつけた絹傘とが、捜索隊によってこの島国の僻地で発見された、それぞれ、前者は巨人の歩道〔北岸、アントリム郡にある奇観。岬が一面に多角形の玄武岩の柱で敷きつめられている〕の三番目の玄武岩の柱の上に、後者はキンセイル〔三一〕のオールド・ヘッド岬〔キンセイルの南、〇キロ〕に近いホウルオーブン湾〔オールド・ヘッド岬に通じる〕の砂浜に三十八センチ一ミリも埋って。他の目撃者たちの証言によれば、巨大な白熱の物体が西南西にむかって弾道を描きながら、猛烈なスピードで大気を喰りを立てて飛んでゆくのが観察された。哀悼と同情の電報が各大陸のあらゆる場所から引っぱりなしに寄せられ、またローマ教皇は有難くもみずから進んで布告をくだし、ローマ聖座直轄の全司教区のありとあらゆる大聖堂の教区司教が、われわれの中から不意に召された死者のために、特別の死者のためのミサを同時に執り行うべきことを命じた。災害救助作業や、残骸や惨死体その他の除去作業は、グレイト・ブランドスウィック・ストリート〔D市南岸、トリニティ・コリッジの北に沿って東〕

西にのびる長い通り。現在〔一五九号のマイクル・ミード父子会社〔建築、建築請負、設計立案、建築業者〕とノース・ウォール〔D市北岸、リファイ川にそって税関のピアス・ストリート〔訳〕〕に委託され、それをコーンウォール公爵邸

岸通り〔訳〕七七、七八、七九、八〇号 T・C・マーティン〔スレート、タイル製造業者〕に委託され、それをコーンウォール公爵邸

下の軽歩兵連隊の兵卒と将校とが、ガーター勲爵士、聖パトリキウス〔三〕勲爵士、フリーメイソン・テンブル騎士団

〔アメリカに本部を置く。中世の同〕員、枢密顧問官、パス上級勲爵士、下院議員、治安判事、医学士、殊勲章備用者、御釜勲爵士、

名宗教騎士団の精神を継承〔訳〕員、名宗教騎士団の精神を継承〔訳〕員、枢密顧問官、パス上級勲爵士、下院議員、治安判事、医学士、殊勲章備用者、御釜勲爵士、

獵犬管理官、王立愛蘭士学士院会員、法学士、音楽学博士、救貧法救貧委員、ダブリン・トリニティ・コリッジ特別研究員、愛蘭士王立大学特別研究員、愛蘭士王立医学コリッジ特別研究員、愛蘭士王立外科コリッジ特別研究員、海軍少将、サー・

ハーキュリーズ・ハニバル・人身保護、令状・アングラスン殿下閣下の総指揮のもとに加勢した。

だれも穴から出て以来こんな凄まじい光景に接したことはなかった。いやはや、もしも奴のどたまのわきに、あれが宝籤

みたいにくまくまくだっていたら、奴は金杯賞〔32―33―34参照〕のことを必ずや想い出しよう。そうだとも。だが、もしそうなら、

ていたら、いやもう、市民のやつは暴行と殴打で、それにジョウは幫助の疑いでばくられたらうよ。御者が怒り狂ったよ

うに馬車をすつ飛ばして、奴の生命を救ったことは神がモーセを作り給うたと同様に確かなことだ。なに？ イエスにかけ

て間違いはないさ。だから市民のやつはありったけの罵声を浴びせかけたというわけさ。

――俺はきやつを仕留めたか、どうだい？ って奴はなあ。

――そういうと奴は、犬〔五八〕のやつにむかって大声でいう――

――ギャリ、あの男を追っかける！ さあ、追っかけるんだ！

かくしてわれわれが最後に見たものは、町角を曲る馬車のやつと、その上で身振り手振りよろしく何やらわめいている羊

顔の野郎〔B〕と、敵をばらばらにしてくれようと耳を寝かせ、死物狂いで馬車を追いかけている雑犬のやつであった。五

で百〔五四〕！ さまあ見ろ、たしかにあいつはそれに見合う報いを奴から受けたんだ。

そのとき、見よ、彼ら全員のまわりに眩き光がさし、みなが見守るうちに、かれの乗りたまえる戦車は天に昇れり。しかして彼らが見し戦車のかれは輝きの環光〔三一〕に包まれ、日のごとき衣を着、「月のごとくに美わしく」、はなはだ「恐るべき」により、彼らは畏れかしこまりて、敢てかれを見ざりき。かかるうちに天より声ありて、呼ばわりて云いたもう、「エリヤ！ エリヤ！」。それに答えて、かれは声高らかに云えり、「アバ！ アドナイ！」。そのとき、彼らは、雲霞のごとき御使いたちに護られて、かれ、かれご自身、ブルームの子エリヤが、シャベルで投げ出されし土のごとく迅速に、輝きの環光にむかいて昇るを見き、リトル・グリーン・ストーリー〔D市北岸、ケイペル・ストーリーと並行して走るグリーン・ストーリーの南に続く〕のダナフー酒場〔食料雑貨、茶、葡萄酒、& スミス〕の上空を四十五度の角度にて。



その二 正誤表

頁	行	誤	正
五	六	〔1-19〕 <sup>テロ</sup> 〔注〕	〔1-19〕 <sup>テロ</sup> 〔誤〕
六	二	遊びに耽りながら一緒に	遊びに耽りながら、一緒に
一三	四	テリ〔2-19〕	テリ〔2-10〕
	六	スロイン・ラット 君の息災を	スロイン・ラット 君の息災を
一四	一〇	伯父のレオ〔Bレオポルド・〕	伯父のリオ〔リアポウルド・〕
	二	フィールド〔2-1〕	フィールド〔2-1〕
		ナネテイ〔2-13〕 <sup>ナ</sup> 〔ナ〕 <sup>ナ</sup> 〔参照〕	ナネテイ〔2-13〕 <sup>ナ</sup> 〔ナ〕 <sup>ナ</sup> 〔参照〕
一六	一〇	ハーリング〔2-1〕	ハーリング〔5-1〕
	一六	愛蘭土愛国団〔2-4〕	愛蘭土愛国団〔2-5〕
	一七	オウカーナン〔2-18〕 <sup>ナ</sup> 〔参照〕	オウカーナン〔2-19〕 <sup>ナ</sup> 〔参照〕
一七	八	『ふたたび国家』〔2-5〕	『ふたたび国家』〔2-6〕
一八	九	激しい運動〔2-5〕	激しい運動〔2-6〕
二一	七	レオポールド	リアポウルド
二四	一八	ケラハ〔3-1〕	ケラハ〔2-1〕
二五	一一	勅任判事	市最高判事

二八	一八	老勅任判事
二九	一二	テリ〔二一〕 コーニ・ケラハ〔三二〕
三一	六	權勢を誇り際猛 <small>まゐ</small> ぎ 〔二六〕のところまで
三六	九下	オウエン・オウゲロウニ司祭
		老市最高判事
		テリ〔二一〕 コーニ・ケラハ〔三二〕
		權勢を誇りひと際猛 <small>まゐ</small> ぎ 〔七一〕のところまで
		オウエン・オウゲロウニ司祭